

ツの生活の文学的、理論的、哲学的、幻想的時代は終わったようだ。」

И.С. Тургенев Полное собрание сочинений и писем в 30 томах том соч. 1 с. 292 Издат. Наука, М., 1978

(4) В.Г. Белинский Эстетика и литературная критика в 2 томах том 2 с. 707 Издат. Художественная литература, М., 1959

(5) 同上

(6) 『作家の日記』1873年の2『昔の人々』の所に次のようにある。「私は熱烈なる社会主義者である彼に会った。そして彼は私と直接無神論から話し始めた。」

Ф.М. Достоевский Полное собрание сочинений в 30 томах том 21 с. 10 Издат. Наука, Л., 1980

(7) 後で触れる『同時代覚え書き』の中でツルゲーネフもペテルブルクについて「ペテルブルクの夕焼けの幼想的な光は毎日繰り返す。」(3)と同.C289)と「幻想的」という言葉を使って表現している。ただドストエフスキーのように幻が出現する所まではいっていない。

(8) (6)と同じ全集 том 2 с. 48

(9) 前掲書に併録の『ペテルブルク・フェリエトン』P.177

(10) 同上

(11) 同上P.184

(12) (3)と同.C.283

(13) 同上

(14) 同上C.286

この部分はゲーテの『ファウスト』から想を得てベルリオーズが作曲した『ファウストの劫罰』を評する際の言葉。彼はフランスのロマン主義には無縁であった。

(15) 同上C.287

ドストエフスキーと絵画

池田和彦

昨年11月、ロシア文学科の演習の席上筆者は「ドストエフスキーと絵画——背景と問題点」と題し、ドストエフスキーがその著作のなかで言及している絵画のうち、三つのものをとりあげ、その絵をめぐるいくつかの問題点の指摘を行なった。本稿ではこのうち、エドガー・マネの「ニンフとサチュロス」をめぐる問題につき、その後の調べで判明した事柄の簡単な報告をしておきたい。

(1)

長年の課題であった農奴解放令の発せられた1861年のその秋、ロシア各地では農民反乱が頻発し、またおりから大学紛争が起こるなど世情必ずしも天下太平といい難かったが、帝都ペテルブルグでは恒例の美術アカデミー展が開かれる。開会は当初の予定より8日遅れの9月18日より(1)ジャーナリズム各誌が一ぱしの批評を掲載するところから察するに一応の社会的事件、文化的行事であったらしく、(2)これに遅れじと一文を掲げたのが、同じ年創刊されたばかりのドスト

エスキ兄弟の雑誌「時代」(第10号, 10月末刊), 題して「1860-61年の美術アカデミー展覧会」, 執筆者は現在なお確定されていないものの, 1918年のグロスマン以来ドストエフスキーのものとする見方があって, 現在刊行中のアカデミー版全集もこの立場をとる。(3)ドストエフスキーが美術批評とは奇なこともあるものと, くだんの一文を読み進めると, 次のような一節にぶつかり驚かされよう。

ウージャス ウージャス ウージャス
……, そしてパリのマネ氏が出品した「ニンフとサチュロス」。ひどい, ひどい, ひどい! この絵が展示されているのはもちろん意図あってのことで, このうえなく陳腐な作品を描き, ニンフの体に死んで五日した死体の色をつけた画家の奇想が, どれだけ醜悪なものに達しうるか示すためなのだ。」(4)

現代において女性の理想的肉体を描くことの困難さをいい, 展覧会の絵の女性の肉体のひどさの例としてドストエスキーがあげたもので, 驚愕と憤怒をまじえた **ужас** の三連呼には笑われるが, しかしことは笑いごとではない。マネ氏とはこれがあのフランスのエドガー・マネにはかならないのだが, 1861年といえばマネが「草上の食事」や「オリンピア」でスキャンダルを巻きおこす以前, ようやくこの年の春, サロンに入選した「ギター弾き」にメダルが与えられ, テオフィーユ・ゴーチエ等一部の人々の讃辞を得はしたものの, いまだ世間的にはほとんど無名の存在であった。そのマネの絵がどうしてロシアにまでやってきたのか。それに「ニンフとサチュロス」という絵は, 現在マネの作品カタログにはない。のみならず引用したドストエフスキーのマネ評そしてそれに続く一節には, 単にドストエフスキーとマネとの偶然の出会いという面白さに止まらぬ, マネ評自体として, さらにそれを超えて, 19世紀後半という時代の思潮を背景に感じさせる注目すべき点を含むと考える。

(2)

1861年の美術アカデミー展へのマネの絵の渡来経路については, Д.Г. バールスカヤの研究がある。(5)確定的な事実が判明したわけではないが, 興味をお持ちになるむきもあると考えるので, この研究の調査, 推測を多少詳しく紹介しておく。

バールスカヤが美術アカデミーの古文書を調査した結果, アカデミー展への外国画家の作品受け入れに関する直接的な文書は見つからなかったものの, この展覧会につき美術アカデミーとロシア外務省がとり交した書簡から, 二つの文書が見つかったという。一つは, 1861年5月13日付の, 美術アカデミー副総裁から外務省へ宛てたもの。内容は, ウィーンやパリ, ジュネーブ, ローマ等, ヨーロッパ12の都市(6)の大使館を通して, 諸外国の画家にロシアの美術アカデミー展についての, 後述のような宣伝を広くだすよう依頼したもの。第二の文書は, 同年5月19日付け, 外務省から関係都市の大使館使節に, 外国の画家達に美術アカデミー展につき知らせるよういったもの。この文書には, ベルリンやウィーン等5都市(7)での新聞広告費用に関して, 外務省から美術アカデミーに呈示された勘定書も同時に含まれていた。しかし美術アカデミーの古文書のうちには, パリの新聞雑誌の広告を示すものはなかったという。これらの文書には, ロシア国内向けと同一の宣伝文も付されていて, 作品の受付期間(7月15日~8月15日)や, 6月1日までに画家の氏名, 居住地, 簡単な画業歴, 作品のジャンル, 大きさ, そして売却希望者は, 絵の値

段など知らせるように示されていたという。

マネ自身がこの広告を見たかどうか定かでないが、ちょうどこの頃、6月22日パリのロシア大使館に宛てられ、後に外務省により美術アカデミーに転送された(7月5日受理)Лл.Монден(8)という人の仏文の手紙があって、文面には次のような一節が見られた。

「ルーベック— ペテルブルグ汽船会社の代理人という私の地位及び私のロシアでの交際が、自分達の絵をつつがなく運び、その一部を展覧会の期間中に政府やペテルブルグの住民に売ることによいだろうと考えた芸術家の仲間達の頼みで、私はその委任を承知し、またパリの一流の画家達と連絡をとりました。」

さらに彼は同じ手紙で大使に、保険金や運送費、ペテルブルグでの滞在費などを請求しているという。確かにこの男が絵の輸送にあたったとできる文書はないが、バールスカヤはアカデミー展の案内書に照らし、彼が美術アカデミーとマネを含むフランスの画家達との仲介をしたと推測している。即ち案内書によればマネのほかにはシャルル・モンジューも展覧会に出品していて、モンジューは1860年始めのマネの、親しい画家の友人でもあり、「芸術家の仲間達」('amis artists') に符号するというのである。また代理人の男が関係を結んだという第一級の画家達とは、T. クーチュール、R・フレリ、E・イザベであったろうと推測する。彼らの弟子達の作品が展覧会に展示されているからである。また例え、この代理人と美術アカデミーとの交渉が成立しなかったとしても、彼の運んだ絵は、当初彼が期待していたような多数ではなく、10枚ほどだったらしいので、彼の地位は運送費を最小限にするのにより力があつたろうと推測する。そしてその十枚の絵とは、モンジュー2枚、ウージェニー・ゴーチエ7枚、マネ1枚だったろうというのである。

以上がバールスカヤの調査、推測の概略であるが、ではマネの絵のロシアでの評判はどうだったか。

美術アカデミー展に出品されたマネの「ニンフとサユロス」の評判は極めて悪く、この点ドストエフスキーのマネ評は決して例外的なものではなかった。当時の展覧会評のうち、簡単なながらもマネについて触れたものは「時代」以外にも三つあり、例えば「ロシアの言葉」(1861年10月号)ではミナーエフにより、「展覧会でこの絵ほど下手な絵はない。すべて—描線、構図、人物、色彩—すべてあまりにも下手で不正確なので、思わずこのフランスの画家の臆面のなさには驚き怪しんでしまう。」と、また新聞「ロシアの老兵」(9月19日)にも、アヴェールキエフによりマネの「下手なニンフ」のことが触れられているという。(9)さらに「イースクラ」誌(10月号)にはマネの絵の戯画まで載せられており、これは観衆の間に外国画家の絵に夢中になる傾向が全般的にあるのを皮肉り、外国画家を辛辣に懲らしたもので、マネの絵は懲らすに値したのだという。(10)



Рис. 1. — Карикатура из журнала «Искра» (октябрь 1861 года) на картину Мане «Нимфа и Сатурн». Рисовал Н. Степанов. Гравировал П. Куренков.

Барлскаヤはこのマネの不評について、三つの理由を指摘している。(11)一つは、当時、二年後のクラムスコイ等14人の画学生による美術アカデミー脱退事件に象徴されていくような論争が、展覧会及び美術アカデミーの教育、運営をめぐるあり、改革を要求する左派系のジャーナリズムには、主張の一つとして、美術アカデミー展における外国画家の圧力排除をいう機運のあったこと。第二は、一方保守的な批評家達は、同時代の絵画の「理想的かつ美的」な感情、感覚の喪失を絶えず叫んでいて、実はマネの絵が彼らの逆鱗にふれるような絵だったこと。そして第三は、そのようにひどい絵と見えるにかかわらず、マネの絵が売値として1000リーブル(4000フラン)という、不当とも思える高値がつけられていたこと、などである。(12)

ドストエフスキーのマネ評は、このうち第二の理由と関係深いと考えるが、前掲のような彼の驚愕と憤怒を誘ったマネの絵とは、では一体どのような絵だったのか。この点及びドストエフスキーのマネ評を注目すべきものとする由縁につき述べる余裕は今はないので、それについてはまた別の機会に詳論することとしたい。

注

- (1) 現在刊行中のアカデミー版ドストエフスキーに全集第19巻(以下Д.П.Т.19.と略記)によれば、9月10日より開会と記されているが(P. 319),注(5)のБарлскаヤは、これが予定の日でありこれより遅れたことを明記しているので後者に従う。

- (2) E. Valkenier, *Russian Realist Art*, Ann Arbor, 1977.によれば,1880年代においてもなおペテルブルグでさえ美術展は年に2~3しかなかったという (P. 212) ,, 移動派も現われていない60年代始めのこの美術展の役割の大きさが推測されよう。
- (3) Д.П.Т.19. стр. 314~319. なおこの展覧会評の執筆者についてはドストエフスキーを否定する見方, 一部を彼によるものとする見方など様々あるが, 筆者自身はマネ評を含む評論前半は彼によるものという立場から書いていることをお断わりする。
- (4) Д.П.Т.19. стр. 157.
- (5) A.G. Barskaya, "Edouard Manet's Painting, 'Nymph and Satyr,' on Exhibition in Russian in 1861" (in Russian), *Academia Republicii Populare Romîne, Omagiu lui George Oprescu cu puilejul împlinirii a 80 de ani*, Bucharest, 1961. (p. 61~68).
なお執筆者原名は, Д·Г·БАРСКАЯ, 1961年当時, レニングラードの研究者。
- (6) 他に, ブレーメン, ドュッセルドルフ, ミュンヘン, ドレスデン, アントワープ, ブリュッセル, スtockホルム, フィレンツェ。
- (7) 他にケルン, リボルノ, ローザンヌ。
- (8) 原名, L. Mondain かとも考えるが, 確かなことはわからないので, バールスカヤのロシア語表記をそのまま用いておく。
- (9) Д.П Т.19. стр. 323~4.
- (10) Barskaya, op. cit., p. 64. なお掲載した戯画は, 同論文のコピーからの転載であることをお断わりする。
- (11) Ibid., pp. 64~5.
- (12) なお, バールスカヤは, マネのロシア美術展への出品の動機を, この年両親と別に暮らし始めたマネが, 後に彼の夫人となったシュザンヌ・レーンホフとの結婚を望み, その資金を得るためではなかったかと推測している (同論文P61)。

チ ャ ー ホ フ と ツ ル ゲ ー ネ フ

望 月 恒 子

I

チャーホフとツルゲーネフを並べて論じることは, チャーホフの生前から, しばしば行なわれてきた。他の作家と比較されるのはチャーホフの好むところではなかったが, 批評家や友人たちは彼の作品に好んで<ツルゲーネフ的>な特色を見てとった。

雑誌で仕事をはじめたばかりのチャーホフと晩年のツルゲーネフとの間に直接の交渉はもちろんなかったが, 彼の青年時代にはツルゲーネフの同時代人の名が二, 三登場する。それは作家グリゴローヴィチ (1822-1899), 詩人 Я.П.ポロンスキイ (1819-1898), および A. Н.プレシチャーエフ (1825-1893)らである。1883年に没したツルゲーネフよりも10年以上長く生きた彼らは, その結果としてチャーホフという全く新しい型の作家の誕生と開花を目のあたりにすることになった。ツルゲーネフの友人であったポロンスキイは, グリゴローヴィ